

資料紹介

『會津八一全集』未収の俳句

明治四十一年の『新潟新聞』掲載句

中西亮太

まえがき

會津八一の文学作品としては主に短歌が知られているが、短歌を本格的に作り始める前の八一は、専ら俳句を作っていた。宮川寅雄『會津八一』（紀伊国屋書店、昭四四・一一）は、八一の俳句関係の活動が、かれの青年時代の文学的教養の土台 になり、のちのポエジーの基礎的鍛練になったと述べている。このことに異論を唱えるものはいないであろう。八一の文学活動の総体を考えるときに、八一の俳句は、やはり見ておかなければならない。

ここに紹介するのは、八一が明治四十一年に『新潟新聞』に寄せた俳句六十四句のうち、坂口守二『會津八一と越後の文人』（新潟郷土誌料研究会、昭五六・一二）によってすでに紹介されている二十四句を除いた、四十句である。今回、『明治四十一年の『新潟新聞』の全紙面を調査し、その四十句を見出したものである。

その四十句のうち三十三句は、十二巻本『會津八一全集』（中央公論社、昭五七・三丁五九・五。以下、全集と記す）に収録されておらず、全集刊行以後も紹介されることがなかった。本稿の第一の目的は、この三十三句を紹介することである。残りの七句は、全集にすでに収録されている。但し、そのうちの四句は全集では年代不明とされていた。本稿の第二の目的は、その四句を紹介し、以てその制作年代を明らかにすることである。全集の俳句・明治四十一年の部は、全三十四句である。そこに本稿が紹介するこれらの句を追加すれば、八一の明治四十一年作の句数は倍増することになる。

なお、最後に残る三句のうち、二句は全集の俳句・明治四十一年の部に、すでに入っている。（同年の書簡に見える句、並びに出所不明の句）。また、一句は、全集の俳句・明治四十一年の部から落ちているものの、同年の句としてすでに知られている。その句を記す明治四十一年の書簡が、全集に収録されているからである。つまり、これら三句は新出句でなく、年代不明とされていた句でもない。しかし、ここでは、新聞に同時に掲載された句との関連性を重視し、これら三句を新聞掲載時の通りに他の句と並べて掲げることとする。

さて、今回の四十句が明治四十一年の『新潟新聞』に掲載されていることは、これまで、研究者の知るところとならなかった。それは、やや不思議なことのように思われる。八一は前年、明治四十年の五月から八月にかけて、同じ『新潟新聞』の俳句欄の選を担当していた。八一がその時期、及びそれ以後しばらく、同紙に多くの句を寄せたであろうことは予想が付くのである。四十年の同紙掲載句については、早く和泉久子『新資料付注 會津八一書簡集』（笠間書院、昭四三・二）が紹介している。また、四十一年の同紙掲載句についても、冒頭で触れた通り、坂口がすでに二十四句を紹介している。しかし、今回の四十句はなぜか、未報告のまま残されていた。このことは、八一の未知の著作

を探索する余地がまだ少なくないことを示していると思う。

本稿で紹介する資料の意義を、少し考えておこう。八一の俳句が八一の文学活動の総体を考えるときに見なければならぬものであることは、初めに述べた。加えて、私は、今回の四十句は、八一の短歌を考える上で、ことに重要な関連資料になり得ると思っている。そもそも、明治四十一年とは、八一にとってどのような年であったか。ことさらに言うまでもないであろうが、この年は八一の生涯において、特に記念すべき年である。同年八月に、初めて奈良を旅行したからである。後年、八一は東洋美術の研究を志すが、その第一のきっかけは、明治四十一年の奈良体験にあったと見てよい。そして、八一の歌の読者にとって重要なのは、この奈良旅行で、八一が二十首の歌を作ったことである。これらの歌が、八一の奈良の歌の始めとなったのである。これに関して、拙稿「會津八一『南京新唱』への道 俳句から短歌へ」(『早稲田大学會津八一記念博物館紀要』六、平一七・三)で、一つの問を立てた。専ら俳句を作っていた八一が、初めての奈良では、なぜ俳句でなく、短歌を作ったのか。何か短歌形式でなければならぬ理由があったはずではないか。拙稿ではその問に対する私見を示したが、ここでそれを繰り返すことはしない。ともかく、従来は、同年八月の句としては、内容から奈良旅行の後の作と推測される 帖にあまる奈良絵葉書やけさのあきが知られているだけであった。ところが前掲の拙稿をまとめた後で、私は同月の『新潟新聞』から今回の四十句中の十三句を見出した。内容から、奈良旅行中の作でなく、旅行直前と直後の作と推測されるものである。この発見は、八一が初めての奈良旅行の前後の時期に日常的に句作をしていたこと、それにも関わらず奈良旅行の句は残さなかったことをより確定的にした。これにより、初めての奈良旅行で、八一はなぜ俳句でなく短歌を という問を立てることの妥当性は、いよいよ確かなものになったと思われる。

このように、今回紹介する明治四十一年の句は、八一の短歌を考える上でも、ことに重要な関連資料になり得るのである。

凡例

- 一、本稿において紹介するのは、明治四十一年の『新潟新聞』に掲載された會津八一の句、並びにその題詞である。但し、坂口守二『會津八一と越後の文人』がすでに紹介している二十四句とその題詞は略した。
- 一、山型括弧の内に掲載日を記し、次いで題詞と句を掲げた。
- 一、各句の上に、通し番号を振った。
- 一、十二巻本『會津八一全集』未収句は、句の番号の上に「十」の印を付けた。
- 一、句・題詞を掲げるに際し、仮名遣いは原本のままとし、旧漢字は現行の字体に改めた。濁点の有無は原本に従った。
- 一、最後に註を付けた。

本文

五月十日

- 五智⁽¹⁾より某へ便の端に
 十一 ちりぬるは散りつ・花の盛哉
 十二 御仏に人をあつむる桜かな

五月三十日

春咏夏吟 其一

某の老師の印を刻して贈らる・を謝す

- 十三 石を切る刀紫に春の暮

木村竹香⁽²⁾羅漢印譜なりて句を需めければ

- 四 花ちりて日暮れかほなる羅漢⁽³⁾哉

- 十五 花を吐くらかんもあらん夕月夜

画賛 二句

- 十六 やみを縫ふ声一針やほと・ぎす

- 十七 山里や人すこやかに夏の草

六月一日

春咏夏吟 其二

修学旅行⁽⁴⁾のかへるさ五智にたちよりて

十八 つかれたる身をぬかつくや春の寺

九 葉桜の仏にちかきやとりかな⁽⁵⁾

一〇 大仏や五体ならんで春の風⁽⁶⁾

先の日書生某世を果敢なみて自ら死にしあり

十一 春の山路ゆき尽してはかへりみよ

郊外所見

一二 堀をぬくたけのこ二本ほと・ぎす⁽⁷⁾

六月八日

五智行

新井途上

十三 石を掃く石屋の庭の若葉かな

五智にて

十四 山吹のかき根く・りて春ぞ行く

羅漢吟 追加

十五 花や松らかな昼寝のいびき哉

- 一六 泥乾く羅かんのすねの落花哉⁽⁸⁾
 一七 らかん寺やさくらの上の月一⁽⁹⁾

六月九日

窓前四句

- 十一八 桐の葉の風にもまる・五月哉
 十一九 みなつきの雪とがりけり燧山
 十一〇 つくぐくと物の悲しき青葉哉
 十一一 立ち並ぶ柿の若葉の夕日かな

六月十七日

人の村居の近況をとくに示す 五句

- 十一二 鳥うち到我が名知られて夏帽子
 十一三 今年また尊くれたる媪かな
 十一四 麦笛や一里にあまる麦の中
 十一五 おもふごと扇に書きて昼寝かな
 十一六 先生のちまき喰はる・まなご哉

探題水

十一七 楼をめぐる木の間の水や明け易き

八月五日

折々の句

十一八 書読まぬ窓に飛びかふ螢かな⁽¹⁰⁾

十一九 朝の蚊の仏の花にかくれけり

十二〇 五月雨や野茨こほれて十余日

十二一 鮒鮓や琴を抱いて君来たる

十二二 (詞書略す) アラ涼しの三千大千世界哉⁽¹¹⁾

八月九日

楓軒⁽¹²⁾より麦の粉あまた貰ひて

十二三 蜂とふや麦の粉くらふ鼻の先

十二四 麦の粉のむせぶにあまる昔かな

十二五 淋しさに麦粉とり出し喰ひけり⁽¹³⁾

十二六 山里のかたき砂糖や麦の粉

土三七 麦の粉を来る人ごとにす・めけり
 土三八 山鳩のいつしか遠し麦の粉

八月二十三日

土三九 朝顔の中の裸の主人かな

四〇 葉かくれて一つ朝寝の蕾かな⁽¹⁴⁾

註

- (1) 五智 は現在の新潟県上越市の地名。同年四月三日付桜井政隆宛書簡に 明日或は五智に赴きて 云々とあり、同月二十一日付式場益平宛書簡には 五智如来に詣で、という詞書と、大仏や五体ならんで春の風 の句が記されている。
- (2) 木村竹香は、新潟市古町(八一の生家のあった町)に店を開いていた篆刻家。安藤更生『書豪會津八一』(二玄社、昭四〇・一〇)が竹香と八一の交流について触れている。それによれば、竹香は八一の書を初めて高く評価した人物であるという。
- (3) 四番句は、全集の俳句・明治四十一年の部に、木村竹香子に羅漢の句を問はれて という詞書とともに載るが、その出所は不明。
- (4) 修学旅行 は、八一の当時の勤務先・有恒学舎の旅行で、同年五月六日から西頸城郡の海岸に二泊したものである(同年五月五日付桜井政隆宛書簡参照)。
- (5) 九番句は、全集の俳句・年代不明の部に、五智にて という題詞とともに載るが、その出所は不明。
- (6) 一〇番句は、註(1)で触れた四月二十二日付式場益平宛書簡にすでに見えるので、実際は四月の五智行の作であろう。なお、大正二年の随筆「落日庵抄」には、一〇番句の改作 大仏や五体ならんで秋の風 が、旧作に曰く という詞書とともに

に出てくる。全集の俳句の巻は、一〇番句を載せず、この改作を大正二年の部に載せている。

- (7) 一二番句は、全集の俳句・年代不明の部に句だけが載るが、その出所は不明。
- (8) 一六番句は、四月二十二日付桜井政隆宛書簡に見える。
- (9) 一七番句は、全集の俳句・年代不明の部に句だけが載るが、その出所は不明。
- (10) 二八番句は、同年六月二十三日付桜井政隆宛書簡の歌　いくまきのふみやよめるとことしまた蛩とふなりわがまどのもと
と、内容・言い回しが類似する。
- (11) 三二番句の、(詞書略す)、は原本のまま、掲載紙の編集担当者が挿入した註記と思われる。元原稿にあった詞書を、字数の都合で略したのである。
- (12) 楓軒は、八一の有恒学舎時代の同僚田中忠太の俳号(吉池進『會津八一伝』昭三八・八)。
- (13) 全集の俳句・年代不明の部に、三五番句の類句　麦粉などひとりとり出しくらひけり　が載る。
- (14) 四〇番句は、全集の俳句・年代不明の部に載る。但し、上五　葉がくれに。その出所は不明。

(なかにし・りょうたノ本学大学院博士課程)